

脇役が語る古写真「葵祭」から「葵橋」

その2

前回に引き続いて、今回も葵祭の写真を見ながら、少し当時の様子について想像を巡らしてみたいと思います。下の写真は前回紹介した石井行昌（いわいゆきまさ）氏撮影の写真です。場所は旧葵橋東詰めを下流側から撮影した写真だと思います。



「葵祭・路頭の儀」(石井行昌写真資料No.694)

皆さんはこの写真を見て一番に目が行く

のは何処でしょうか？写真手前の幼い子どもをおんぶしている女性に目が行きませんか？

撮影されたのは今から約100年以上前なので、その真相はわかりませんが、勝手にこの女性の葵祭の日を想像してみましよう。



「葵祭・路頭の儀」(石井行昌写真資料 No.693)

同じ時に写した別の写真では、その女性がこちらを振り向いています。女性の顔を見ると、まだあどけなさが残る少女のようです。地方の農家から京都の老舗呉服問屋に奉公に出され、大事な跡取り坊ちゃんの子守をしながら葵祭の観覧にやって来たのではないのでしょうか。

「これが噂の葵祭か」とつぶやきながら、橋の上を眺めていましたが、当時まだ珍しかったカメラの方がより気になる様子で、こちらに視線を向けてしまったという所でしょうか。

写真の中の真実を記録していくことは大変重要ですが、その中に写っている主役以外の真実を記録することはとても困難です。

今回は、脇役から当時の社会の様子を垣間見てみました。この写真にタイトルをつけるとしたら、ズバリ「おしん」でいかがでしょうか？

(おわり)

(2018年4月27日公開)